

# ポーランドで、日本語表記の教材を作成する

アダム・ミツキエヴィチ大学 久山 宏

一介の文学読者・文学訳者の私のささやかなお話は、日本語教育学や言語学の豊かな研究成果に根ざしている、などとはお褒めの言葉をいただけるはずもそのつもりもなく、単にポーランドにおける日本語教育史の一齣をスケッチするにとどまります。ポーランドを仕事の場にしておられない大方のみなさまの、普遍的なご関心をいただけそうもない主題です。

「お褒めの言葉」とご主人にすりよってくる飼い犬のようなことを申しましたが、ただ今、すばらしい日本語での発表をお聴きになられたばかりの、同僚、アンナ・コメンジンスカさんに日本語表記を教えた、という点では、自信を持ってみなさまからご褒美をお求めできるのではないのでしょうか。アンナさんは、ポズナニ日本学科の第一期生です。ということは、私が日本語表記を教えた第一期生でもある。在学中から、もっとも優秀な学生でした。卒業論文でも心理学的観点から漢字を取り上げ、卒業後は日本でもその分野の研究を積んでこられました。彼女は、日本学科で後輩たちに表記を教え、数年前からは私と共同で教材執筆に携わってものいます。怠惰な性の私を若い力に後押ししていただいている形ですが、我々の仕事は、活字として刊行される近い将来にみなさまのご批判を仰がせていただくことにして、ここでは目を過去に、それもポーランドの過去に向けていたい、と思います。すなわち、今日までにポーランド人学習者対象に作成されてきた表記教材の作成方法論をふりかえること。その歴史を簡潔に記述すること。

今回の連絡会議の基調講演の部では、アルフレッド・F・マイエヴィチ教授が「ポーランドの日本研究」の歴史を、物語ってくださいました。隣りホールで開かれている日本関係図書展の案内でもあった訳ですが、実は先日、教授と共にその支度に励みながら、話し合ったことがありました。それは、日本関係図書のなかでは「意外にも」日本語教材がもっとも少ない、ということ、さらには「意外にも」刊行された点数の大半をなすのは表記の教材だ、ということでした。小辞典・会話帳を別にすると、ポーランドで刊行されたのは、主に既成教科書（『日本語Ⅰ』『日本語初歩』）への注釈なのでした。

このことも、私の口から、表記教材小史をお聴きになる際に、お忘れになっていただきたくないんです。私の報告は「試」「行」「錯」「誤」の四節に分けられますが、流れ・うねりを語らせるだけの量の歴史史料が存在している、ということです。

## 【試】

漢字の何もかもが、新しかった。珍しかった。  
いろいろと、試してみた。

1970 『日本語 経済を専攻する人の Book 1』(ワルシャワ中央計画統計大学)  
[引用参考書:『基礎日本語コース』(長沼直兄著)『新選漢和辞典』(小林信明編)、北村・岡崎恒夫]  
<当用漢字表/読みにくい漢字語/総画索引/行書・草書一覧表/中国新旧字体対照表/同訓異字要覧>

1971 『日本語文法大要』 *Zarys gramatyki języka japońskiego* (ワルシャワ中央計画統計大学)

<当用漢字表> (A.N.Nelson 『最新漢英辞典』からのコピー)

1971 『漢字入門』 *Wprowadzenie do Kanji* (ワルシャワ中央計画統計大学)

[翻訳原本: *The First Step to Kanji. Part I* (大阪外国語大学編) 翻訳 ジグムント・ピエトワ]

1970-71年に、ワルシャワ中央計画統計大学(現・ワルシャワ中央商業大学)が刊行した三冊の仮名・漢字の解説を含む日本語教材には、はっきりした種本がありました。大胆にも『漢和辞典』や『漢英辞典』の一部を複製してしまった二冊は別として、注目されるのは、大阪外国語大学編集 [The First Step to Kanji] 第一部を基にした『漢字入門』という教材です。1969年に出た原本は、今日でも三部作として入手できる評価の高い教材ですが、その日本語部分のコピーを左ページに、英語部分のポーランド語訳を右ページに収めて制作された教材です。

個々の漢字の成立と意味に焦点を絞った教材で、熟語も言語生活における重要性を基準に選ばれた、というよりは、漢字の意味の証明として提出されています。こうした単漢字の形と意味への関心は、漢字提出順序にはっきりと反映してきています。

見やすい例として、145番～156番の漢字配列を引いておきます。

[→進→達→過→違→込→連→車→運→選→引→強→風→]

ついでに言えば、ポーランド人日本語学習者の目前に現れた最初の表記教材原本の方法論(字形による漢字配列)は、後に、伊藤芳照『日本語漢字入門』(1978年・国際交流基金)によって、極限まで推し進められることとなります。その典型例。

[→矢→知→医→区→失→鉄→丙→病→元→完→全→院→]

さて、「種本」「コピー」「翻訳」と独創性を否定するような概念を並べましたが、もう一つついでに、今私たちが立ち止まっている「試みの時代」に、ポーランドで複製という行為が意味したことも、思い出しておきたい、と思います。

1970年前後数年にわたってワルシャワ大学日本学科講師を務められた工藤幸雄氏が著された、『ワルシャワの七年』(1977年・新潮社)の一節:「印刷機は国家の統制下にあり、大学にはコピーの機械はおろか、日本式の謄写版すらないので、もっぱら黒板にたよらざるをえない」「どうしてもコピーを作りたいときは、商社の支店の世話になりました。(……)コピーをここで作っていたことは、内務省当局につつぬげに知らされていたと、あとで聞かされました。」(205頁)

「コピー」または「コピー+翻訳」による漢字教材三点は、当時ワルシャワ中央経済統計大学専任講師だった岡崎恒夫氏主導の下に作成されました。岡崎氏はコピー機を利用する可能性をお持ちだった訳で、また著作権法にも寛容な時代だったのでしょう。ただ、ここで、続く「力行の時代」の副主人公さらには主人公となられる岡崎氏を弁護しておきますと、彼が三冊のコピー教科書用に選ばれた漢字情報は、漢字の現在(当用漢字表・読みにくい漢字語・総画索引・同訓異字)と歴史(行草書・中国新字体・さらには [The First Step to Kanji] を協力者のポーランド人に翻訳させた、という事実そのもの)をほぼ漏れなく包括し得ていたのです。

## 【行】

ワルシャワ大学に、すぐれた理論家・力行の士が現れた。

その方法論、実践の軌跡、反響、協力者・後継者……。

今日、彼の仕事をどう読むか。

- 1973 ヴェスワフ・コタンスキ (日本語校閲及び書字・小原雅俊) 『日本語表記例文集・一年生用』  
Wiesław Kotański (Konsultacja językowa i grafika Masatoshi Kohara)  
*Teksty do nauki pisma japońskiego dla I roku* (ワルシャワ大学)
- 1976 ヴェスワフ・コタンスキ (日本語校閲・岡崎恒夫/書字・足立和子) 『日本語表記・第二階梯』  
Wiesław Kotański (Konsultacja językowa Tsuneo Okazaki. Grafika Kazuko Adachi)  
*Drugi stopień nauki pisma japońskiego* (ワルシャワ大学)
- 1980 ヴェスワフ・コタンスキ/岡崎恒夫 (書字・岡崎恒夫) 『日本語表記例文集・一年生用教材』  
Wiesław Kotański, Tsuneo Okazaki (Grafika Tsuneo Okazaki)  
*Teksty do nauki pisma japońskiego. Skrypt dla studentów I roku Japonistyki* (ワルシャワ大学)
- 1986 岡崎恒夫 (書字・岡崎恒夫) 『日本語表記・第三階梯』  
*Trzeci stopień nauki pisma japońskiego* (ワルシャワ大学)

「力行の時代」の主人公は、先ず、ヴェスワフ・コタンスキ教授です。早くも1946年、コタンスキ氏はワルシャワ大学卒業時に『漢和辞典における配列』と題された論文を執筆されていますが、二十七年後の1973年に第一部が刊行された『日本語表記例文集』は、まさにその漢字配列の点で、世界的にもユニークなものです。

彼の論理的な思考の跡を追ってみましょう。

- (1) どのような漢字をどのような順序で提出するかは、(特に教室以外の場所で漢字との接触が行われない環境では) 一定の原則にしたがって定められなくてはならない。開かれた教材としての「言語生活」で学ばせるべきではない。
- (2) 教育漢字や(当時の)当用漢字の一覧表よりは、漢字使用頻度の統計資料を尊重するべき。  
なぜならば、漢字規制は使用頻度統計に基づきながら国の方針で揺れ動く可能性を持っているから。すなわち、漢字の現状はまず統計に反映する、という確信。
- (3) 小学生を対象とした表記学習の第一段階では具体的な意味内容を持つ漢字のみが提出されるのが望ましいが、外国の大学生は当初から概念を表示する漢字により強い知的好奇心をかきたてられる。また、統計資料は、抽象的意味を持つ漢字の方が使用頻度が高いことを示している。

こうしてコタンスキ教授は、国立国語研究所の行った統計に基づきながら、漢字リストを作成します。『日本語表記例文集・一年生用』から、使用頻度百十一番目の漢字「経」の項を、参照ください。左ページの例えば親字「経」の左上にある(111)は漢字番号、その下には[1.585]という使用頻度のパーミル(千分率)が示されています(ちなみに、もっとも使用頻度の高い漢字「一」「日」の場合、全漢字中に占める割合は、約十パーミルつまり一%ほどです)。形態的に類似した漢字や旧字体がその脇に、下段には読みが示されています。さらに十文字ずつを一課に組んで、既習課に登場する漢字からなる熟語を巻末にまとめて提示する。こうして、漢字で書かれ得る日本語語彙については、ほぼ「閉じられたシステム」を作成されたわけです。また右ページには、熟語を用いた例文の仮名・漢字への書き直し練習問題が集められています。

このおそらくは世界的にも新しい方法論によって作成された教材の不幸は、練習問題にありました。コタンスキ教授は、当時ワルシャワ大学に留学中だった、現・東京外国語大学教授小原雅俊氏に例文のチェックを依頼してはいるのですが、まだ『現代国語用例辞典』のような資

料が刊行されていなかった時代でもあり、(先ほど述べたように)抽象度の高い漢字とその熟語を可能なかぎり平易な構文に収めようとした無理が出て、日本語として不自然な文が数多く出てしまった訳です。いってみれば、用例によって、単漢字を熟語のなかで生かし・閉じられた教材を開く、という点で十分な成功を収めなかった。私がこの教材と出くわしたのは1987年ですけれども、熟語用例の選ばれ方に生理的な不快感を抱いた一方で、著者の日本語表記という混沌を整理せんとする力業には、強く感動しました。

不自然な例文は、岡崎恒夫氏が協力者となって1976年に出版された『日本語表記・第二階梯』では大幅に減り、第一部のぎこちない例文も1980年の第二版では見事に訂正されています。これから、際立った例をあげて、改訂の跡を示しますが、今回の報告のために73年版と80年版をテキスト批評的に比べてみることで、文学読みとして強い知的快感を覚えたことを告白しておかなくてはなりません。

- (1) 1973 二人は今まで見合いもしなかった。(22d)  
1980 彼は今まで、見合いをしたことがなかった。
- (2) 1973 会議へは、四分間ほど行きます。(24f)  
1980 会議は、四分間で終わりました。
- (3) 1973 学者の間にも、発見者がある。(34a)  
1980 その発見者は、アメリカの学者です。
- (4) 1973 部長の前に、ラッパ手が二人立った。(41a)  
1980 ブランデー・オリンピック会長のわきに、ラッパ手が十人立っていた。
- (5) 1973 パリは今でも学問の本山です。(45b)  
1980 メッカは、イスラムの本山である。
- (6) 1973 中大は国立大学であるとは思わない。(48a)  
1980 日大が国立大学だと思っている人がいる。
- (7) 1973 その会社の前を日々八九度ぐらい通ります。(72a)  
1980 今日は九度もあるから、会社に行くのをやめる。
- (8) 1973 戦地へ行く軍人は、気分がよくなかった。(93f)  
1980 あれは戦地に行く軍人たちです。
- (9) 1973 書生時代は私は、地理学にも関心があった。(99e)  
1980 むかし学生のことを書生といった時代があった。
- (10) 1973 女人は女というより言い方より気高そうです。(108g)  
1980 女人とは女のことで、今ではこんな言い方をしません。

まさにふさわしい対話者=後継者が見つかった、と評するべきでしょう。それでも、コタンスキ教授も負けていませんで、『第二階梯』序文には、こう書かれるのです。「初版出版後数多くの日本人から例文の不自然さを指摘された。しかしながら、著者の考えでは、表記の練習を目的とした書き取り文は文法的に正しければそれで十分で、意味・文体・もっともらしさなどは、問題にならない」(6頁)と。この断言は、言語教材を言語生活に開くことを放棄した人間のそれで疑問がありますが、いずれにせよ『第二階梯』を最後にコタンスキ氏は、表記教科書執筆を降りられるのです。

第一部改訂版からは、使用頻度の表示さらには部首についての情報が消え、熟語だけが並べられています。こうして、岡崎氏の手が入った第一部改訂版以降のワルシャワ大学表記教科書は、訳語の記載されていない熟語辞典に練習問題集を加えたような形態になってゆきます。そ

の最終『第三階梯』が出版されたのが1986年、私がボズナニで日本語表記の教育を開始する前年です。

### [錯]

首都を遠く離れたボズナニに、先行者の業績を乗り越えようとする不埒者がやってきた。  
その錯乱した足取り……………。

1988 久山宏一『「日本語の書き方」補助教材』

Koichi Kuyama. *Materiały pomocnicze do nauki pisma japońskiego* (アダム・ミツキェウ 伊大学)

1990 久山宏一『「日本語の書き方」補助教材 第二冊』

Koichi Kuyama. *Materiały pomocnicze do nauki pisma japońskiego. Zeszyt drugi*

(アダム・ミツキェウ 伊大学)

さて、ボズナニ市のアダム・ミツキェヴィチ大学に日本学科が開設されると同時に、図書交換制度によって、ワルシャワ大学から日本語教科書、すなわち表記三部作を頂戴します。担当者として、大学一年生に与えるには情報が過大だ、という印象を持ちます。さっそく必要最低限の熟語だけを抜き出した『「日本語の書き方」補助教材』を、ワープロに打ち込んで出版します。その次には、情報を節約しすぎたような気もするし、漢字間のつながりも説明したいし、反対語・同義語などについても教えたくなくて、第二冊をまとめます。こうして、私も表記教材作成の泥沼に足を取られていきました。

さて、ワルシャワでは何が起こっていたのでしょうか。私は、岡崎氏は『第四階梯』『第五階梯』を続々と執筆しておられるのだらう、と推測していたのですが……………。

1989年のある日のこと、日本語の本を借りにワルシャワ大学日本学科に入って、書棚を見ました。すると、ここまでみなさまに長々と物語ってまいりましたワルシャワ版表記教科書が棚の隙間を詰めるために使われていた訳です。嫌な予感がしました。後でわかったことですが、岡崎氏は『第三階梯』までを活字にするだけで表記の授業からは手を引いておられた。後継者たちはもうコタンスキ・岡崎教科書を使ってはおらず、図書館のゴミになっていたのです。ボズナニの日本学科は、ゴミを大量に頂戴したことになりますけれども……………。

これも後で知ったことになりましたが、当時岡崎氏は「ポーランドの日本語教育・日本研究」(宮島直機編『もっと知りたいポーランド』所収・1992年・弘文堂)と題されたエッセイに、次のように記されてもいました。「漢字教育には、かなり重点をおいている。漢字だけを別に教えるのではなく、常に会話実習で使うテキストに合わせて授業を進める。(……………)」ということは、その年に使用される教材によって教える漢字が違って来る訳で、教える側は毎年異なった漢字教材を準備することになるが、刻々変わる国際情勢や日本の言語習慣に合わせた教材の漢字を教えるやり方は、学生からも高い評価を受けている。」(326頁)と。「漢字だけを別に教える」「毎年同じ」教材としての漢字教科書の著者のお一人が、その存立を正面から否定されたことになり、呆れるほかありませんでしたが、教育が創造的活動である以上、方法論を切り替えることもあるいは教育そのものから撤退することも、それに携わる者の権利の一部なのでしょう(現在は会話教育に専念されている岡崎氏は、奥様と共著でポーランドで最初の本格的な日本語自習教科書を出版社に渡された、とお聞きしております)。

私事に戻りますと、今は錯乱を続けながらも、[Basic Kanji Book]の漢字提出順序に従いながら、個々の熟語へ例文を付し、辞書的機能も持たせた教材を作っています。しかしその編集

原則をご説明申し上げるのは、冒頭に申しましたように、いずれ完成した暁ということにいたしましょう。

一言で申しますと、コタンスキ・岡崎教科書の影から抜け出せない私には、どうしてもある程度閉じられた教材への憧れがあり、大袈裟に響くでしょうがポーランド文化に貢献したいという野心もある。[Basic Kanji Book]を代表とする現代のすぐれた教材には、「漢字のグループ分け」によって順列的ではなく分類的に漢字の混沌を整理する傾向があるのでしょうか（コタンスキ教授は、順列は作られたものの、グループは作られなかったことになります）。それをさらに、熟語用例集として整理し（その観点から、筑波大学の教科書は私にとっては、雑然とすぎているように感じられます）、ポーランド語の訳語や索引も付けています。……ま、それはしかし、出来てからの話です。

### 【誤】

そして、1995年……。大出版社が、ポーランド全国に、漢字教材を売り出した。  
その著者の、方法的誤解。

1995 ボグスワフ・ノヴァク『日本の文字辞典』  
Bogusław Nowak. *Słownik znaków japońskich* (ワシヤワ)

さて、今年1995年には、ポーランドにおける日本語表記教材の歴史において特筆されるべき事件が起きました。ボグスワフ・ノヴァク氏の『日本文字辞典』が、ワルシャワの大出版社から、一般読者向けに発売されたからです。

この書物のプラスは、第一に発行部数が多いこと（その啓蒙的役割は、巨大なものでしょう）、第二に仮名についての説明が懇切丁寧であることですが、遺憾ながら、漢字部分は決して高く評価することができません。コタンスキ氏の導入した頻度順親字配列とも、新しい教材が試みている漢字の形態的・意味的グループ分けからも後退して、日本の小学校における教育漢字の学年別配当を盲目的に採用し、個々の漢字の重要度を無視して提出熟語数を五つにかざり、ざっとページをめくっただけでも、「候鳥」「耳漏」「倉敷料」「司牧的」「列聖式」「責め道具」といった、かなり特殊な語彙が見受けられ（本書には著者紹介が載せられていないので、その正体すら実は知らされていないのですが、「列聖式」はじめ「聖」の熟語の異常なほどの「充実」ぶりなどから、キリスト教宣教に従事しておられる方ではないか、と推測されます）、しかも著者は序文で、「熟語を見れば漢字の読みが憶えられるだろう」（42頁）などとうそぶいている。一漢字に一義だけを対応させた索引にも、実用性の点で問題があります（例えば、漢字「暁」の意味として、「場合」「折り」の類語としてのそののみが採られている）。これは、「漢字学習は語彙学習である」という最近の日本語教育のコンセンサスをすっかり転倒させて「単漢字の読みを憶えさせるために語彙を選ぶ」とする発想なのでした。

……埒もない批判を行いました。こうした試行錯誤も表記の重要性を学習者に知らせるに足る教材が誕生するまでの産みの苦しみのようなもの。コタンスキ氏が、四半世紀以前に『日本語表記例文集』序文に誇り高く記されたように、「日本語表記はきわめて困難だが、それを愛する者は、豊かな文字伝統を持つ日本文化を理解する鍵を得る」（51頁）のですから。

ポーランドというごく地域的な話題を取り上げましたが、なんらかみなさまのご体験と結ぶところがあつたならば、幸いです。

Uniwersytet im. A. Mickiewicza  
Instytut Językoznawstwa  
w POZNANU  
4297

UNIwersytet WARSZAWSKI  
WYDZIAŁ FILOLOGII OBCYCH  
INSTYTUT ORIENTALISTYCZNY  
Zakład Japoński

Wiesław Kolański

TEKSTY DO NAUKI PISMA JAPANEJSKIEGO

dla I roku

Konsultacja językowa i grafika  
Masatoshi Kohara



WYDAWNICTWA UNIwersytetu WARSZAWSKIEGO  
1973

118

- XII
- (111) 経 又 POR. 71.10, 小 POR. 85, 又 POR. 41, 土 POR. 82 経 經  
1583  
(112) 千 十 POR. 5  
1572  
(113) 海 シ POR. 80.101, 人 々 母 海  
1582 POR. 57.85  
(114) 何 イ POR. 86.104, 一 POR. 1, 口 POR. 109, 一 POR. 10.85  
1587  
(115) 原 一 POR. 1, 一 POR. 47.105, 一 POR. 104.109, 一 POR. 2, 小  
1588  
(116) 入 一 入 入  
1584  
(117) 近 介 POR. 84.92, 之 POR. 50 近 近  
1514  
(118) 相 木 POR. 110, 目 POR. 50  
1516  
(119) 平 一 POR. 1, 一 POR. 81.68, 十 POR. 5.  
1491  
(120) 現 手 POR. 70, 見 POR. 20  
1484

- (121) ケイキョウ たつ、へる  
(122) セン ち  
(123) カイ、ハイ うぬ、うぬ(はち)  
(124) カ なに、なん  
(125) ゲン はら、(わ)ち  
(126) ニュウ いる、いれる、はいる  
(127) キン、コン、コノ ちがい、ちがづく  
(128) ソウショウ あい  
(129) ハイ、ビョウ たいら、たいら、ひら、ひらたい  
(130) ゲン あわられる、あわらす

XIII

- 111 a. kono kaisei-o keiji-suru hito-wa gon-to jinsei-ka  
b. koido-wa tokai judo jūnifun-desu  
c. okyō mata-wa kyōmon-wa kaisei-to-wa anaji-de-wa nai  
d. nani-shiro toki-ga tatte iru-uo-de oaidawasai  
e. ano hito-no iu-o haru kana-wa tsuibita kana-de-wa nai
- 112 a. nansen-to iu gakuai-ga gaikoku-e itikai  
b. are-wa gamin-ni hitori-to iu hito-de  
c. ano onna-wa umi-ni sennan yama-ni sennan-da  
d. sen-kyūshaku-nansūnan-ni syūgaku-abieshita  
e. hessankiro-o hete nihonkai-ni chikazuite  
f. chiyoko-wa ano gunjin-no chōjo-desu
- 113 a. chichūkaï-no higashi-ni shōjūin-ga aru  
b. zainan mata keizai-ni iku zōso-ni narimashite  
c. nihon-wa kaikoku-de-kara, nansen-no yō-ua kaigun-o tsukuritai  
d. haruchikukai-wa yōroppa-no hitobu-no makai-desu  
e. sengo-wa nō detai dare-uo tsūō-ga-wa kaigō-o yukanaï  
f. kaichū-ni-mo migoto-ua dōbutsu-ga ikite iru  
g. sen-kyūshaku-sanjūinua nihongun-wa shenhai-de-uo tsakatta  
h. aiteu-ua mada umi-no mono-to-uo yama-no mono-to-uo ukaranai  
i. unobara-haruka-ni gisru akurui sono  
j. ano-ga yamin umi-no naka-ni hitte
- 114 a. sare-o nanedo nan-ni naru-ka  
b. nani-kara hangeshite yoi-ka ukaranai  
c. ano ugoki-wa ittai nonigoto-darō  
d. chikazuite-uo nanimono-uo niwakatta  
e. kyō-wa nanijūni-desu-ka-to tōro-no ichigon-uo iwakakatta  
(5) Kōryū-wa nanihon yoroshiku  
e. nanimono-no kōō-darō-ka